

抽象的人間労働についての一考察

汪 春 梅

要 旨

具体有用労働和抽象人間労働は労働の二重性。本論文以马克思『資本論』第五章「労働過程和价值増殖過程」为基础，考察在労働生産過程中对于抽象人間労働の規定。由于马克思在『資本論』の第一章「商品」中，直接从两商品交換关系中対使用价值进行捨象，把抽象人間労働規定为价值的实体，因此影响了「労働過程」中的抽象人間労働の正確規定。宇野臧弘扩大了労働過程の内涵，提出了抽象人間労働の具有的独立，超歴史的特点。但是在对于資本主義生産編成下の抽象人間労働の規定却不明确。在此基础上，山口重克用「二重構造」の立場对抽象人間労働重新定义，并强调在单纯労働为基础的資本主義生産編成下の抽象人間労働成为价值的实体的意义。

キーワード……抽象的人間労働 労働生産過程 单纯労働 超歴史性 二重構造

はじめに

マルクスは『資本論』の冒頭の「商品」においては、商品の交換関係における交換価値を、その使用価値とはまったく独立して現れるということから捉え、商品（これは労働生産物に限定されることになるが）の使用価値を捨象し、価値の实体が抽象的人間労働であることを導き出している。この「蒸留法」は、商品の価値实体が労働であることを論証する仕方として不十分であるばかりでなく、後の労働の二重性のとらえ方について大きな影響を及ぼした。

つまり、マルクスは第五章「労働過程と価値増殖過程」の中のあらゆる社会形態から独立して考察される労働過程で労働はもっぱら使用価値を形成する具体的有用労働の側面に限定して論じており、それに対し、抽象的人間労働については価値増殖過程で価値を形成する労働として論じている。このように、マルクスは超歴史的な過程である「労働過程」で使用価値の側面、それゆえに具体的有用労働、「価値増殖過程」で価値の側面、それゆえに抽象的人間労働、という具合に労働の二重性を振り分けて論じたため、『資本論』では抽象的人間労働と具体的有用労働とともに超歴史的なものである点が極めて不明確になっているといつてよい。

確かに、商品経済が社会的生産を支配する資本主義経済の下で、初めて抽象的人間労働が客観的根拠をもって認識できることになるが、しかしだからといって商品生産を離れてはこうした人間労働の量的側面が存在し得ない、ということにはならないはずである。

マルクスの議論を初めて整合的に組み替えたのは宇野弘蔵である。宇野弘蔵は『資本論』の「労働過程」を、社会の物質的生産の一般的基礎をなすものと位置付けなおし、「労働 = 生産過程」としてその内容を拡大する。すなわち、「労働過程」を使用価値の生産の過程としてのみ一面化せず、マルクスが示唆した「生産物の立場」をさらに展開し、この視点からとらえた労働過程を「生産過程」と規定し、この「生産過程」において労働の二重性をあらゆる社会形態に共通して現れるものとして把握する。さらに「生産的労働の社会的規定」として、階級社会の基礎をなす剰余労働についても説明を与え、社会の物質的生産に関する一般的規定を明かにしたうえで、「価値形成 = 増殖過程」の考察に移り、この一般的規定を実体的基礎とする価値の形成と増殖の過程を解明する。

まず、宇野は価値法則を論証する前提として労働力を商品として売る労働者は、一日の労働力がその維持に必要な一日の生活資料を買い戻さなければならないということが、絶対的な条件になっていると論じたのである。そのうえで、労働生産過程で論じられる社会的な労働編成が資本主義的關係として実現されることにより、価値法則が成立すると論じるとしてよい。

かくして、価値の実体としての抽象的人間労働は社会的生産編成に裏付けられる形で、客観的に把握されることになる。本論文ではマルクスの『資本論』の第三篇第五章「労働過程と価値増殖過程」を踏まえ、宇野の『経済原論』を検討したうえで、抽象的人間労働の規定について検討する。

一 『資本論』の第一巻第五章「労働過程と価値増殖過程」についての検討

1-1 「第一節 労働過程」についての検討

マルクスは「第一節 労働過程」の冒頭で次のように論じた。

「労働力の使用は労働そのものである。労働力の買い手は、その売り手を労働させることにより、労働力を消費する。労働力の売り手は、労働することによって、“現実”に自己を発見する労働力、労働者となるが、彼はそれ以前には“潜勢的に”そうであったにすぎない。自分の労働を商品に表わすためには、彼はなによりもまず、その労働を使用価値に、なんらかの種類の欲求の充足に役立つ物に表わさなくてはならない。したがって、資本家が労働者につくらせるものは、ある特殊な使用価値、ある特定の物品である。使用価値または財貨の生産は、資本家のために、資本家の管理のもとで行われることによって、その一般的な本性を変えはしない。それゆえ、労働過程は、さしあたり、どのような特定の社会的形態にもかかわらず考察されなければならない」(K.,I,S.,192)。

マルクスが論じたように、労働者は資本家のもとで労働によって使用価値を作らなければならない。その使用価値は「一般的性質」を有しているとしなければならないため、労働者が労

働によって使用価値を生産する「労働過程」は、どんな社会形態から独立に、超歴史的なものとして考察されるべきというふうに理解してもよいであろう。

次いで、超歴史的なものとしての「労働過程」を考察するため、マルクスは労働過程の三要素、すなわち、労働そのもの、労働対象、労働手段について論じた。マルクスは労働過程を「人間と自然との間の物質代謝」(K.,I,S.,192)として捉え、人間が労働によってその目的を実現する素材となるもの、いわゆる原材料を労働対象として規定した。そして、「労働者が自分と労働対象と」(K.,I,S.,194)の間に、目的に合致した活動をより効果的にするためのものを労働手段と規定した。労働手段は「導体」として役立たせるものであると論じられた。

さて、以上の説明を終え、マルクスは三要素によって「企図された」(K.,I,S.,195)労働過程が行われれば、その結果としての生産物を作り出すと論じ、角度を変え、「生産物の立場から」(K.,I,S.,195)労働過程を考察したのである。彼は次のように述べた。

「労働過程においては、人間の活動は、労働手段によって、当初から企図された労働対象の変化を生じさせる。過程は生産物においては消失する。過程の生産物は、使用価値すなわち形態変化によって人間の欲求に適合させられた自然素材である。労働はその対象と結合した……全過程を、その結果の、すなわち生産物の立場から考察するならば、労働手段と労働対象の両者は生産手段として、労働そのものは生産的労働として現われる。」(K.,I,S.,195 - 196)

すなわち、生産物の立場から「労働過程」を考察すると、ある労働過程の生産物は別の労働過程の生産諸手段としてこの労働過程には入り込み、「生産物は労働過程の結果であるだけでなく、同時にまたその条件でもある」(K.,I,S.,196)と論じたのである。このように、生産物の立場から捉えかえすと、諸労働過程は生産手段を通じてたがいに有機的に関連していることが分かる。このように生産物の立場から考察すると諸労働過程が社会的に関連しあっていることが明確になる。労働は「単に特定の使用価値を形成するものとしてあるだけでなく、社会が必要とするさまざまな使用価値の生産のために支出される人間の総労働の一部としての性格を与えられている」(浜田〔1976〕: 90)ことになるというよい。マルクスは「生産物の立場」から労働過程を考察することによって、労働過程社会的関連を示したと思われる。

しかし、マルクスは続いて「人間と自然とのあいだにおける物質代謝の一般的条件」の考察においては「労働者を他の労働者たちとの関係において叙述する必要がなかった」(K.,I,S.,198)とした。このような展開は先に提起された「生産物の立場」からの労働過程の観点とは異なっている。

冒頭で論じたように、さまざまな使用価値を生産する「労働過程」を、どんな社会からも独立に、超歴史的なものとして考察すれば、それは人間と自然の物質代謝過程一般と共通の性質をもつものとして抽象されて考察されているのであるから、生産の社会編成という面からも分析すべきであろう。言い換えれば、この時点で抽象的人間労働を論じる必要がある。しかし、マルクスはここで抽象的人間労働を積極的に取り込んでいない。最後に部分的な労働過程を取

り出し、「労働者を他の労働者たちとの関係において叙述する必要がなかった」とし、結局「生産物の立場」から分析方法によって社会的な労働生産編成について積極的な論証を展開するということはなかった。

マルクスが抽象的人間労働を積極的に展開したのは「価値増殖過程」においてである。続いて節を変えて検討してみよう。

1 - 2 マルクスの「価値増殖過程」についての検討

第二節では、資本家による商品生産が取り上げられている。資本家にとっては、生産物はあくまでも「交換価値をもっている使用価値」(K.,I,S.,201)でなければならないし、また資本家は「貨幣を前貸して得た生産諸手段と労働力との価値総額よりも、大きい価値をもつ商品」(K.,I,S.,201)つまり剰余価値を生産しなければならないとしたうえで、マルクスはこれまでの考察は商品の生産過程の一側面にすぎず、「商品そのものが使用価値と価値との統一であるのと同様に、商品の生産過程は労働過程と価値形成過程との統一でなければならない」(K.,I,S.,201)と論じた。

先に紹介したようにマルクスは『資本論』の冒頭の「商品」においては、商品の交換関係から「蒸留法」いわゆる論法で価値の実体が抽象的人間労働であることを導き出している。そのうえでマルクスは第五章では使用価値と価値を対応させるように、第一節「労働過程」において使用価値を形成する具体的有用労働のみがあらゆる社会形態に共通なものとして論じ、価値を形成する抽象的人間労働については触れようとせず、次の第二節「価値増殖過程」では価値を形成すると強調したのである。

マルクスは綿糸を生産物とし、綿花を原料とし、紡錘を労働手段として具体的な例を挙げ、生産物としての綿糸にそくして商品の価値形成を説明した。すなわち「.....それぞれの商品の価値は、その使用価値に物質化されている労働の分量によって、その生産のために社会的に必要な労働時間によって、規定されている。このことは、労働過程の結果としてわが資本家の手にはいった生産物についてもあてはまる。したがって、まずもって、この生産物に対象化されている労働が計算されなければならない」(K.,I,S.,201)。また労働においては「質、性状、および内容が問題ではなく、いまやその量が問題となるだけである。これはただ単に計算されればよい。われわれは、紡績労働が単純労働、社会的平均労働であると仮定」(K.,I,S.,203 - 204)すると論じられた。

ここで注意しなければならないのは、商品の価値が使用価値の生産に社会的に必要な労働時間によって規定されることは「自明の前提」(浜田〔1976〕:92)として論じられている点ある。おそらく冒頭の「蒸留法」を論証済みのものとし、価値形成の前提になっているというのがマルクスの考えであろう。そのうえで、マルクスにあたっては、価値の実体が抽象的人間労働で

あるとはすでに証明されていることなのであるから、ここで問題とされるのが抽象的人間労働のみであり、使用価値の生産として論じられた「労働過程にある場合とまったく別の観点から考察しなければならない」(K.,I.S.,203)。

なぜ商品の価値を形成する労働が、あらゆる社会形態に共通する労働とは「まったく別の観点」から考察されなければならないのか。確かに、抽象的人間労働は商品経済が社会的生産を支配する資本主義経済のもとで、はじめて客観的根拠をもって認識できる。しかし、あらゆる社会形態に共通する労働の一面として抽象的人間労働も展開できるであろう。結局、「価値増殖過程論」の展開は、冒頭の「商品」論で二商品の交換関係をとって説明されていた、いわゆる交換による価値関係の形成を前提にして、商品生産物に対象化されている労働の同質性が導出する議論を繰り返したものにすぎない。しかし、抽象的人間労働は生産物を作るために無数のさまざまな生産過程からできていることから論じなければならない。「労働過程」はどんな社会形態から独立した人間と自然の物質代謝一般として抽象することは可能である。人間労働の「同一性」もそのような物質代謝過程で論じられており、商品生産に特有なものではない。マルクスは「使用価値」と「価値」をそれぞれ、「具体有用労働」と「抽象的人間労働」と分離して規定し、「価値形成過程」において必要な労働時間によって規定された抽象的人間労働のみに限定して論じたのである。その結果、「生産物の立場」から有機的な社会の労働生産編成について積極的に議論を展開することはなかったし、他方では抽象的人間労働を「労働過程」とはまったく異なる商品生産価値増殖過程として考察したのであった。

1-3 労働の二重性の規定についての問題点

マルクスの「労働過程」論と「価値増殖過程」論に対し、宇野弘蔵はその議論を組替えることを主張している。宇野は次のように論じた。

「あらゆる社会に共通な生産過程そのものが商品形態を通して行なわれることを問題にしなければならない。いい換えれば商品の形態だけを問題にする場合にはそれは特有なものから説くことができるし、またそうしなければ、財貨からでなく、商品から説きおこした意味も明確でなくなるのであるが、生産過程となると資本の生産過程、或いは商品の生産過程に特有な面から説くということとはできない。この点は、価値の生産という場合、労働力が商品として購入せられたとしても、生産過程では労働力も価値を有するものとして生産物の生産をなすものではないということにも明かにあらわれている。それは使用価値を生産しつつ価値をも生産することになるのである。商品経済も実質的にはこの生産過程を把握するとき、そしてそれは全面的には、資本の生産過程としてはじめてそうなるのであるが、あらゆる社会に共通な一般的な基礎にまで入りうることになるのであって、その法則性もその根拠を与えられる。その根拠は、商品形態そのものにあるのではなく、あらゆる社会に共通な、私のいわゆる経済生活の原則にも

とづくということにある」（宇野[1955]：85 - 86）。

宇野が指摘したように、あらゆる社会に共通な生産過程が商品形態として行なわれることに基づいてその法則性を論じるべきである。価値増殖を目的とする運動体としての資本が生産過程をとらえ、生産過程がこの資本の循環運動に媒介されて実現されるところにおいてはじめて、商品の価値が全面的に抽象的人間労働としての実体に裏づけられたものとして把握できるのである。それゆえ、商品の価値実体は、商品の交換関係から直接にこれを抽出する方法によって明かにされるべきではなく、資本による価値の形成と増殖の過程そのものもなかで規定されねばならない。

マルクスの『資本論』は第一巻「資本の生産過程」、第二巻「資本の流過程」、第三巻「資本主義的生産の総過程」という構成法をとるのに対し、宇野の『経済原論』は第一篇「流通論」、第二篇「生産論」、第三篇「分配論」という構成になっている。第五章「労働過程と価値増殖過程」に当たるところは「労働 = 生産過程」、「価値形成 = 増殖過程」、「資本家的生産方法の発展」という三つの内容に分けて説明されている。宇野の『経済原論』における「資本の生産過程」について章をかえて検討する。

二 宇野弘蔵の『経済原論』における「資本の生産過程」についての検討

2-1 宇野弘蔵の「生産過程」の論証構造についての検討

宇野は旧『経済原論』¹⁾でマルクスの「労働過程」の議論を豊富化させ、あらゆる社会から独立して考察される労働 = 労働生産論として、積極的な展開を見せたのである。宇野はそこでは「A 労働過程」、「B 生産過程における労働の二重性」、「C 生産的労働の社会的規定」という三つの部分に分けて説明したのである。宇野は労働生産過程を単に労働過程として説明するだけでなく、生産物、生産手段、生産的労働、生産的消費といった内容を労働過程の諸契機からひとまず区別し、それを生産過程において説明する。つまり、超歴史的な人間の物質代謝過程は、労働過程の三要素を中心とする労働過程と、生産物の立場から見た生産過程の二側面を持つものとして論じられる。しかも、宇野は、生産過程における生産的労働には、具体的有用労働とともに抽象的人間労働の規定が含まれているとし、さらに抽象的人間労働にかかわるものとして、必要労働と剰余労働の規定すら内包されるものと理解して論じたのである。

まず、「A 労働過程」から見てみよう。

宇野は「労働過程」を「人間が自然に働きかけて生活資料乃至生産手段を獲得」（宇野[1973]：86）し、人間の「労働力を物に変えつつ、物を使用価値として獲得」することと規定した。そして人間の労働力は「単なる物ではなく、またかくのごとき特殊の使用価値を有するものでもない。一般的にあらゆる物に転化し得る力として、したがってまた人間の目的にしたがって

かようにも使用し得る力である」(宇野[1973]:87)と論じた。

ここで留意すべき点は、宇野は労働について「物を使用価値として獲得」するという具体的有用労働の側面で規定するだけでなく、「一般的にあらゆる物に転化し得る力として、したがってまた人間の目的にしたがっていかようにも使用し得る力」として規定している。後者の規定を敷衍することによって、生産過程論で抽象的人間労働を明示することが可能となるといえよう。

次いで、宇野は労働過程と生産過程を区別して次のように論じた。

「労働過程において、人間は自己の労働力をもって労働手段を通して労働対象物に、一定の目的に従った変化を与えて、自然物を特定の使用価値として獲得するのであるが、労働のかかる生産物はもはや労働過程とは離れた一つの物としてあらわれる。自然物と同様の外界の対象物をなすわけである。ただそれは生産せられたる対象物である。そしてこの生産物の見地からすると、労働対象も労働手段も共に生産手段とせられ、労働もまた生産的労働としてあらわれ、労働過程は同時に生産過程となる」(宇野[1973]:88)。

すなわち、宇野は超歴史的な人間の物質代謝過程は、労働過程の三要素を中心とする労働過程と、生産物の立場から見た生産過程の二側面を持つものとして理解すべきと論じたのである。生産物からみた生産過程は、人間が自然に働きかける労働過程と区別して考察する必要があると論じられ、「B 生産過程における労働の二重性」に移る。

宇野は労働の二重性を考察するために、具体的に「六キ口の綿花と一台の機械とをもって六キ口の綿糸を生産するのに六時間の労働を要する」(宇野[1964]:88)という紡績生産過程を例にして説明した。また労働の生産力によって同じ六時間の紡績労働でも生産手段との関係および結果としての生産物との関係を異にし、またそれぞれ対象化されている抽象的人間労働との関係を異にすることを論じた。宇野は「労働力は、元来、特定の有用労働に制限せられることなく、あらゆる生産物を生産しうる、種々なる有用労働として使用されること」(宇野[1964]:52)を労働の二重性の基礎としたわけである。労働の二重性の具体的な展開については新『経済原論』²⁾の叙述をみてみよう。

「紡績過程の労働は、一方では綿花を綿糸にかえ、綿花や機械等の生産手段の生産に要した労働時間を新生産物たる綿糸の生産に要する労働時間の一部分とする、マルクスのいわゆる有用労働として機能し、同時にまた紡績過程の労働時間をも綿花その他の生産手段に要した労働時間と一様なるものとして、新生産物の生産に要する労働時間とする、マルクスのいわゆる抽象的人間労働として機能するという、二重の性質を有しているのである。」(宇野[1964]:51)そして、労働力の計量について、「現に紡績労働でも、また綿花の栽培、機械の製作でも、それ自身のうちにも労働力は種々なる形で支出されるのであって、六時間の紡績労働といえば、すでにそのうちでかかる種々なる形の労働力の支出が同質の人間労働力の支出に還元せられている。またそれだからこそ綿糸の生産に必要な労働として、綿花、機械等の生産に必要な労働と

共に同質のものとして計量されうるのである。それは同一人がこれらの種々異なる使用価値の生産に労働したと考えてもよい」（宇野[1973]：90）と論じた。

以上のように、宇野はマルクスと違って労働の二重性はあらゆる社会に共通するものとして論じた。すなわち、人間労働の特質をさまざまな生産物を生産しうるところに見出し、それに基づいて労働の二重性を説いているといえよう。「人間労働が主体的に自然に働きかける過程を考察する労働過程論においては、人間労働は、その二面が未分化のものとしていわば一体的に捉えられていたが、労働過程が生産過程として考察されることになると、その二面性は、二重性として開示されて客観的に把握されうることになるという理論構成になっているわけである」（山口[1987]：130）と理解してよいであろう。

宇野はさらに労働 = 生産過程論のなかで、必要労働と剰余労働の規定も含まれると論じている。

「この剰余生産物は、それぞれの社会の生産の仕方に応じて処理されることになるのであるが、生産力の一定の発展段階では、社会の一部の者の労働によって他の者が生活し、支配するという階級社会の基礎をなすとともに、また他の社会とのあいだに、そしてまた自己の社会の内部にも、商品経済を導入する契機ともなったのである。しかもこの商品経済自身は、これらの社会の生産力の増進に役立ちつつ、商品経済の発展をもたらしたのである。こうした商品経済の発展は、労働力が商品化して生産過程自身を根底から商品化すると、剰余労働をも商品形態を通して実現することになる。……こうしてあらゆる社会に共通な、人間生活の絶対的基礎をなす労働生産過程は、資本主義社会においては商品形態を与えられることによって、もはやたんなる労働生産過程としてではなく、同時に価値形成増殖過程としてあらわれるのである」（宇野[1967a]：88）。

見られるように、宇野は「労働 = 生産過程」についての三つの部分に分けて考察した。宇野は「労働生産過程」をどんな社会からも独立に、超歴史的なものとして考察し、労働過程の三要素を中心とする労働過程と、生産物の立場から見た生産過程を労働過程の二側面をもつものとして区別して理解する。これは評価すべきことだと考えられる。ところが、「C 生産的労働の社会的規定」において、宇野は「あらゆる階級社会に共通」（宇野[1973]：92）するものとして剰余生産物の規定を価値の形成の前提として規定しているが、これは「労働生産過程」の前の部分とは不整合だと思われる。すなわち、抽象的人間労働はあらゆる社会から独立して考察される労働生産過程で規定されたのであるが、それを、あらゆる階級社会というように抽象した次元でそれを継続的に論じることが可能であるか疑問である。

さらにいえば超歴史的に規定した抽象的人間労働をそのまま、資本主義的生産の下で論じられる価値の実体とまったく同じなものと論じることが問題になる。

このような宇野の「労働生産過程」の論じ方は次の第二節の「価値形成 = 増殖過程」の展開に影響を与えていると考えられる。

2-2 「価値法則論」における価値実体について

宇野の旧『原論』では第二節「価値増殖 = 増殖過程」は「A 価値形成過程」、「B 価値増殖過程」、「C 価値法則の確立」三つの部分から構成されている。さらに「C」は「(1) 価値関係の必然的基礎」、「(2) 商品生産に現われる労働の二重性」、「(3) 商品生産の物神崇拜的性格」に分けられている。本稿では価値法則における価値実体の論証問題を中心とし、一節全体を通して検討してみよう。

『資本論』冒頭における二商品の交換関係による労働価値論の論証については、宇野はこのような論証方法は「労働力の商品化を基礎にして展開される資本の生産過程におけるような、いわば積極的証明とはなっていない」(宇野[1964]: 56)と論じ、資本家と労働者との間の商品交換関係が、「生産過程において実現される、あるいは生産過程をとおしての交換関係」(宇野[1967b]: 232)によって商品の価値の実体も明かになると論じた。価値形成過程について宇野は次のように論じた。

「労働力なる商品が、その生産に要する労働時間によってその代価を支払われるということは、生産資料の代価がその生産に要する労働時間を基準にして支払われることを意味するばかりではなく、生産手段もまた社会的にはその生産に必要な労働時間を基準にして比較計量せられることにならざるを得ない」(宇野[1973]: 96)。

また新『原論』では綿糸生産の例を用いて次のように説明されている。「それは〔労働力の代価を通して買い戻すこと〕筆者)単に労働生産物が商品として交換されるというのではなく、生産過程自身が商品形態をもって行われることを示すものにほかならない。かくしてまたあらゆる生産物がその生産に要する労働時間によってえられるという労働過程の一般的原則は、商品経済の下にあっては、その交換基準としての価値法則としてあらわれるのである」(宇野[1964]: 55)。

見られるように、宇野の価値法則の論証は労働者が「その労働力の代価として受け取る賃銀」(宇野[1967b]: 232)によって、自分の労働の生産物としての生活資料を資本家から「買い戻す」(同上)という関係を前提にして、生活資料としての商品価値の形成を説くという構造になっている。そしてこの「労働者の生活資料の価値規定を中軸にして、他のあらゆる生産物が価値規定をうける」(宇野[1967b]: 230)と論じられている。

すなわち「生活資料の生産は種々なる特殊な生産過程 それがどのように個々の資本によって分担されるかを問わず の有機的な編成によって行われるものであるということから、生活資料以外の種々なる生産物も生活資料を生産する生産手段の有機系列を構成するものとして位置づけうることを基礎にして、それぞれが異なる資本によって生産されている場合の価値規定が行われている」(山口[1987]: 141)と思われる。

「価値法則の確立」では、労働力を商品として売る労働者の場合には、一日の労働力がその

維持に必要な一日の生活資料と交換されるということが、絶対の条件となる。それがまた「あらゆる生産物を商品として価値法則に従わしめる基点」となることを確認し、その上で初めて「商品生産に現れる労働の二重性」の考察に入る。以上論じられた「価値法則の確立」の下で資本主義的に生産過程における労働が「有用労働の面においてかかる生産手段の価値を新生産物に移転しつつ、抽象的人間労働の面で新たな価値を附加することになる」（宇野[1973]:104）。

このように宇野は資本主義社会における単純労働化を基礎において価値法則の論証を試みた。同時に宇野はこの単純労働をあらゆる社会形態に共通な抽象的人間労働として規定されると論じる。しかし、資本主義的生産のもとで実現される単純労働化を基礎において規定された抽象的人間労働と、「あらゆる社会に共通する」抽象的人間労働と同じものとして論じられるのか。

宇野の抽象的人間労働の規定について節を変えて検討してみよう。

2-3 宇野の抽象的人間労働の規定についての問題点

実は、マルクスも『資本論』の第一篇第一章第四節「商品の物神的性格とその秘密」において労働の二重性の超歴史的な性格を次のように論じた。

「商品の神秘的な性格は、商品の使用価値から生じるのではない。それはまた、価値規定の内容から生じるのでもない。というのは、第一に、有用的労働または生産的活動が互いにどんなに異なっても、それが人間有機体の諸機能であること、そして、このような機能は、その内容やその形態がどうであろうと、どれも、本質的には人間の脳髄、神経、筋肉、感覚器官などの支出であるということは、一つの生理学的真理であるからである。第二に、価値の大きさの規定の基礎にあるもの、すなわち、右のような支出の継続時間または労働の量についていえば、この量は労働の質から感覚的に区別されるものである。どんな状態のもとでも、人間は——発展段階の相違によって一様ではないが——生活手段の生産に費やされる労働時間に関心を持たざるをえなかった。最後に、人間がなんらかの様式で互いのために労働するようになるやいなや、彼らの労働もまた一つの社会的な形態を受け取る」（K.,I,S.,85 - 86）。

マルクスはここで「彼らの労働もまた一つの社会的な形態を受け取る」と論じているが、「価値の大きさの規定の基礎にあるもの」が特定の社会として見られるのではない。「社会的形態」での人間労働は特定の社会形態をとるという意味ではないであろう。上記引用文の主旨は、あらゆる社会形態で労働者は労働（具体的有用労働と抽象的人間労働）を通して生産物を作っているというふうに理解できる。つまり、マルクスはここであらゆる社会形態から独立した超歴史的な性格の労働を論じたといえるであろう。しかし、前述したように、マルクスは『資本論』の冒頭の「商品」においては、「蒸留法」によって、すなわち商品の交換関係における交換価値から価値の実体が抽象的人間労働であることを導き出している。そしてマルクスは第五章では使用価値と価値を対比させて論じているように、第一節「労働過程」において使用価値を形成

する具体的有用労働のみがあらゆる社会形態に共通なものとして論じ、価値を形成する抽象的人間労働について触れず、次の第二節「価値増殖過程」では価値を形成すると強調した。このようなマルクスの展開は整合ではないといわざるをえない。

このようなものもあって、抽象的人間労働をめぐるいろいろな説がある。1920年代から抽象的人間労働は「生理学的」な面から解釈する論証もあった。たとえば、イ・イ・ルービンは労働の定義については「生理学的に等しい労働」、「社会的に同等化された労働」、「抽象的ないし抽象的に一般的な労働、すなわち、労働が商品経済で獲得する特種な形態における社会的に同等化された労働」(イ・イ・ルービン[1993]:130)という三つの面から説明する。

しかし、宇野は資本主義的生産編成のもとでの抽象的人間労働は、「生理学的な」アプローチから論証する必要はないと主張した。平田清明の「共通なもの」とは生理学的な意味での人間労働力の支出にほかならないという議論に対し、宇野は次のように論じた。

「商品価値の内容と形式といった場合の内容と、マルクスの[価値決定の内容]といった場合の内容とが、どういう関係にあるかということは、私も実現明確な規定を与えているわけではないが、しかし少なくとも私としてはマルクスのいわゆる[価値決定の内容]という場合の内容は、たんに価値の形式に対する内容といったその特殊の形式と話すことのできないものというよりも、もっと根本的な社会的実体をなすものと考えている。それは形態を離れては存しえないものにして、しかし特殊の形態と必然的に結ばれるものとは解しえない……それはたんに「生理学的意味での人間労働力の支出」に留まるものではなく、社会的なるものなのである。平田氏は、この点を自己流に解釈されて、私の考えをもって[価値の内容]と[価値の形式]との[内的関連を切断する]ものとみられるのである。そしてそういうことになったのは、私が[価値の実体たる抽象的人間労働を、いかなる歴史的な社会にも『共通な』生理学的意味での人間労働量力の支出としてのみ、とらえ……たことに原因する]と[おもわれ]、自ら[ここにおいて、われわれは、抽象的人間労働はかかる意味での労働であると同時に商品＝資本制経済の歴史的社会的規定を自己のうちに構成的に含んだものであり、それゆえにこそ、価値という特殊歴史的な形式をとりうるのだ、ということ想起せねばならない](宇野[1974]:93-94)と規定される。しかし抽象的人間労働が[商品＝資本制経済の歴史的社会的規定を自己のうちに構成に含んだものである]とは、一体、何を意味するのであろうか。[生理学的意味での人間労働力の支出]としての「抽象的人間労働」が、自然本来に商品経済的な特殊規定を[構成的に]もっているものであるともいうのであろうか。そしてそれだからこそ[価値という特殊歴史的な形式をとりうる]ということになるのであろうか」(宇野[1974]:93-94)。

上記のように、宇野は抽象的人間労働は生理学的なものだけではなく、社会的なものとして明記している。そうだとすれば、抽象的人間労働はあらゆる社会から独立した超歴史的なものとして規定されるだけではなく、特殊の社会的形態のもとで規定されうるといふ二本立ての構造になっているはずである。しかし、問題となるのは、宇野が「商品を生産する労働に特有な

るもの…けっしてそうではなく、むしろ反対にあらゆる社会の労働に共通なものが、商品の生産においては、後に明らかにするように、特定の使用価値と共に一定量の価値を生産するという、商品生産に特有なる二重性となってあらわれるのである」（宇野[1964]：52）と論じた点である。

結局、宇野は「特殊歴史的な形式」での抽象的人間労働と「超歴史的な性格」をもつ抽象的人間労働を同じものとして論じたのである。しかし商品経済が社会的な生産を支配する資本主義経済の下で、資本的生産過程に裏付けられる形の抽象的人間労働と、あらゆる社会形態に共通する労働の一面としての抽象的人間労働とは、違う次元で論じられるべきであろう。

章を改めて、山口重克の論証の検討を行い、抽象的人間労働について違う次元でその規定の仕方を考察してみよう。

三 抽象的人間労働の規定についての再検討

3-1 二層構造で規定される抽象的人間労働

山口重克は労働の二重性について、宇野の見解と同じように、それは「どんな社会形態の下での生産過程にも共通の、人間の労働に本来的な性質である」（山口[1985]：93）と規定している。労働の二重性は特定の社会形態だけに特有なものではない。宇野と異なっている点は、山口が労働生産過程は人間の自然との物質代謝の過程としてあらゆる社会形態から独立に考察されることができるという面から規定するだけでなく、また特定の社会形態のもとで労働生産過程が特殊な変造を受けるという「歴史性」を強調していることである。山口は次のように論じた。

「労働生産過程は資本によって担当されることによって特殊な変造を受けるのであり、変造された特殊歴史的な労働過程における効率的な社会的生産関連が価値法則の根拠をなすと考えられるのである。したがって、自然との物質代謝をおこなう人間の労働も同様に2層の構造において捉えなければならない。すなわち、人間の労働も、あらゆる社会に共通に、互いに同質的な抽象的な人間労働と異質な具体的有用労働の二重性を持っているが、同時に資本主義的な労働生産過程においては、それは特殊歴史的に変造された労働としての二重性をもつことになるのであり、したがって、抽象的人間労働にもあらゆる社会に共通なものと同様に特殊資本主義的なものがあると理解されなければならない。そして、価値法則の実体的根拠をなすのは、後者の特殊歴史的な規定性を受けとっている抽象的人間労働であるといわなければならないであろう」（山口[1990]：15）。

見られるように、山口が労働生産過程は二面から理解する必要があると論じた。すなわち、一般的意義での自然との物質代謝を行う労働生産過程と、資本によって担当されることによ

て変造された特殊歴史的な労働生産過程と二つに分けて論じなければならない。したがって、抽象的人間労働もこの二層の構造において捉えられるべきだと論じた。特に、価値法則の実体的根拠をなすのは、後者の特殊歴史的な規定性をもつ抽象的人間労働であることを強調した。

ここで注意しなければならないのは、山口は「資本主義的商品の価値ないし価格の変動のこのような法則性」(山口[1985]:107)のことを価値法則と指すという点である。そうであれば、商品の価格変動に法則性があり、つまり重心(商品の価格変動の重心を指す)があるのは資本主義的商品に特有のことであるから、法則性の根拠は労働生産過程一般から直接に論じられているのではなく、資本主義的に変造された労働生産過程から導き出されていると考えられる。

このように、山口は労働生産過程の「二重構造」から抽象的人間労働の規定について新たな考察を行ったのである。山口のこの指摘は首肯できる。抽象的人間労働はあらゆる社会形態から独立し、超歴史的な抽象的人間労働と、特定の社会形態の下で特殊な「歴史性」をもつ抽象的人間労働と二次元で規定されうる。山口はとりわけ、「労働生産過程は資本によって担当されることによって特殊な変造を受けるのであり、変造された特殊歴史的な労働過程における効率的な社会的生産関連が価値法則の根拠をなす」(山口[1990]:15)と論じ、後者の抽象的人間労働が価値法則の実体的根拠をなす条件であると論じた。

では「効率的な社会的生産関連」の労働過程は何か。山口は次のように展開している。

「資本主義的生産にあっては、人間の生活と人間の労働・生産過程までが資本の行動原則である効率性原則によって極限まで締め上げられ、その意図せざる結果としてはあるが、効率性連関としての基準編成が作り上げられるのであり、価値関係の法則性とは諸資本がその売買関係において自らが作り上げた基準に自らが規制される関係なのである。この場合とりわけ重要なことは、価格変動の重心ないし均衡価格体系の重心は、この資本の効率性原則を受容する労働主体が存在して始めて存在しうるということであろう。」(山口[1985]:128-129)

要するに、議論を進めれば、資本は以上の条件を確保すれば、労働生産過程で労働者が需要され、労働力を極限まで発揮される場合は、抽象的人間労働は価値法則の根拠をなすものとされる。

次いで、効率的な社会的生産関連の労働過程における抽象的人間労働を中心に検討してみよう。

3-2 単純労働と抽象的人間労働

資本主義的生産のもとでの「効率的な社会的生産関連」の労働生産過程を実現するためには、次の二つの条件がそろわなければならない。第一に、生産過程が資本による短期的な訓練でその労働内容を労働者に強制できるような単純労働によって編成されているということと、第二に、産業予備軍の存在という二つの条件である。この条件が整うと、資本は労働者の主体性を

消極化し、生産過程は資本家的単純労働によって効率的に編成されることになるのである。

2-2の中で論じたように、宇野は資本主義社会における単純労働化を基礎において価値法則の論証を試み、また同時に単純労働と抽象的人間労働を同様に捉えているのであった。宇野はあらゆる社会でも「単純な労働力による生産部面が基礎にある」として、抽象的人間労働の「超歴史性」を主張するわけである。山口は労働過程の「二重構造」から抽象的人間労働を規定する。宇野の「超歴史性」に対して「歴史性」をもつ抽象的人間労働も検討する必要がある。しかし、社会的労働分配の基礎にある実現される単純労働は抽象的人間労働とは同じものとして論じられるのか。

単純労働の問題について菅原陽心は次のように論じた。

「単純労働とは、人間と自然との社会的物質代謝との関係で論じられるのであるから、物質代謝が円滑に行われるような社会的な労働配分の調整ないし労働者の養成が実現しようという点から、その規定はなされるべきだということを強調されなければならないだろう。そうすると、人間と自然との社会的物質代謝の特定のあり様に見合った単純な労働の姿が存在し、それに対応した社会的な労働配分の調整ないし労働者の養成のメカニズムが存在すると考えられることになるのであって、資本主義的単純化された労働を基準として歴史的に様々な姿をとって現れる人間労働を単純労働であるかどうかと判断することはできないといえるのである。換言すれば、具体的な労働の姿はそれぞれの時代によって異なるが、基礎的な生産部面にあるかぎり、それは各時代ごとにそれぞれ単純労働として位置づけられると考えられるのである。歴史貫通的に捉えられる抽象的人間労働もそのような事態を踏まえて規定しようといつてよい。かくて、資本主義的な単純労働と抽象的人間労働とは区別して議論しなければならないということとは明かであろう」（菅原[1991]：34-35）。

菅原が指摘したように、単純労働の内実は資本主義的な単純労働と区別して捉えなければならない。資本主義的生産編成の下で単純労働化を基礎において規定された抽象的人間労働が、価値法則の実体的根拠をなすものである点は強調されなければならない。

3-3 価値法則の根拠をなすものとしての抽象的人間労働

人間と自然との物質代謝を行なう人間労働は具体的有用労働と抽象的人間労働と二側面をもっている。具体的有用労働としての使用価値は「一般的性質」を有するため、あらゆる社会から独立した超歴史的なものとして考察すべきだという点に異論はないと思われる。しかし、抽象的人間労働を考察する場合、二次元のアプローチから論じる必要があると思われる。

マルクスは『資本論』の冒頭の「商品」においては、二商品の交換関係における交換価値を、その使用価値とはまったく独立して現れるということから捉え、商品の使用価値を捨象して、価値の実体が抽象的人間労働であることを導出している。第五章の「労働過程と価値増殖過程」

では抽象的人間労働を超歴史的に捉えるという観点を示したものの、結局もっぱら抽象的人間労働を価値形成過程のみで論じ、前の「蒸留法」に則った展開になっている。宇野は「労働過程」の内容を豊富化させ、抽象的人間労働の規定を超歴史的なものとして論じた。しかし、商品経済が社会的生産を支配する資本主義経済の下で、生産過程に裏付けられる形の抽象的人間労働も、あらゆる社会形態に共通する労働の一面としての抽象的人間労働と同じものとして論じたため、抽象的人間労働の規定が不明になったといわざるをえない。山口は「労働生産過程」の抽象的人間労働の規定は二次元で論じられるべきだと主張した。抽象的人間労働は「どんな社会形態の下での生産過程にも共通の、人間の労働に本来的な性質」をもつ「超歴史性」だけではなく、特定の社会形態のもとでの特殊「歴史性」を持つのである。また後者は価値法則の根拠をなすと論じた。つまり、価値法則の根拠となる抽象的人間労働は「資本主義的生産にあっては、人間の生活と人間の労働・生産過程までが資本の行動原則である効率性原則によって極限まで締め上げられ」(山口[1985]:128)るものと考えなければならない。このように、抽象的人間労働が価値法則の実体的根拠をなすということは、資本主義的な単純化された労働力を基礎とする生産編成で論じられるのである。

では、抽象的人間労働について次のようにまとめる。

抽象的人間労働はあらゆる社会形態のもとで生産過程に共通の、人間の労働に本来的な性質である。またあらゆる社会形態から独立に、考察される「超歴史」的なものとして論じられる。同時に、特定の社会形態の下で、資本によって特殊な変造を受ける労働生産過程は抽象的人間労働が価値法則の根拠をなすのである。もちろん前提として資本主義的労働生産編成は極限まで締め上げなければならない。したがって抽象的人間労働は超歴史的なものとして、また特殊的历史的なものとして二次元で規定しうる。

ここで強調しなければならないのは単純労働と抽象的人間労働との関連である。単純労働とは、物質代謝が円滑に行なわれるような社会的な労働配分の調整ないし労働者の養成が実現するという点から規定される。それぞれの時代の生産編成に対応し、単純労働はそれぞれ異なった姿で存在すると考えられる。しかしながら社会的労働配分の調整などが可能となるということから、単純労働はあらゆる社会形態から独立して存在すると考えられる。したがって、単純労働は機械制大工業下の労働として論じられるだけではない。労働配分が柔軟に調整され、社会的再生産が可能になるということから、そういう意味で単純労働という規定が抽象的人間労働と同様に設定できるのであろう。資本主義的生産にあっては、資本による短期的な訓練によって労働内容の労働者への強制が可能な労働として単純化が実現されているのであり、それは資本家的単純労働といえる。すなわち、単純労働も抽象的人間労働のように、あらゆる社会形態から独立したものとして規定することができ、同時にまた資本主義的生産の下で、この資本家的単純労働化を基礎において規定された抽象的人間労働が、価値法則の実体的根拠をなすものである点を強調しなければならない。

抽象的人間労働についての一考察（注）

<注>

- 1) これは宇野[1973]を指す。以下、同書については旧『原論』と表記する。
- 2) これは宇野[1964]を指す。以下、同書については新『原論』と表記する。

<参考文献>

- イ・イ・ルービン 1993 『マルクス価値論の概説』 法政大学
- 宇野弘蔵 1955 『経済学演習講座 経済原論』 青林書院
- 宇野弘蔵 1964 『経済原論』 岩波書店
- 宇野弘蔵 1967a 『現代経済学演習講座 新訂 経済原論』 青林書院新社
- 宇野弘蔵 1967b 『資本論研究 剰余価値・蓄積』 築摩書房
- 宇野弘蔵 1973 『宇野弘蔵著作集 第一巻 経済原論』 岩波書店
- 宇野弘蔵 1974 『マルクス経済学原理論の研究』 岩波書店
- 菅原陽心 1991 『現代ポリティカル・エコノミーの問題構制』 社会評論社 今東博文・折原裕・佐藤公俊所収
- マルクス, カール 1962 *Das Kapital*, Band I, Marx-Engels werke, Band 23, Dietz Verlag.
- 浜田好通 1976 『資本論研究入門』 東京大学出版社 大内秀明・桜井毅・山口重克所収
- 山口重克 1985 『経済原論講義』 東京大学出版社
- 山口重克 1987 『価値論の射程』 東京大学出版社
- 山口重克 1990 『経済理論学会年報第27集 労働価値説の現代意義』 青木書店

主指導教員（菅原陽心教授） 副指導教員（藤井隆至教授・小沢健二教授）